

身体表現の園内研修Ⅱ

—保育者の実践より—

本山 益子、渡邊 友子

筆者らは、2014 年より 2019 年度までの 6 年間に、「身体表現あそび」の保育実践を充実させるための園内研修（44 の保育実践）を継続してきた。今回、その保育実践を題材・ねらい・展開を観点に整理し、園長のコメントを手がかりに保育の変容や保育者の成長を探ることにした。その結果、運動的視点で捉えていたねらいに表現的要素が加味されたことがわかった。保育者主導であった題材選択も子ども主役になり、子どもと楽しむ保育者の姿を確認することができた。

キーワード：身体表現あそび、保育者、園内研修、保育実践、継続

I. はじめに

筆者（本山）は、2014 年度より身体表現の園内研修に指導者の立場に関わってきた。その一端として、この園内研修において実施した、保育者対象の実技講習に関しては、その内容や方法の検証をし、本学研究紀要第 56 集に「保育者の保育実践変容につながることを期待できると推察¹⁾」するに至ったと報告した。

さらに、2014 年度から 2019 年度にわたり継続されてきた園内研修に関しては、日本保育学会において、毎年（2018 年を除く）単年度の報告も行っている。

そこで、今回、この間のすべての保育実践を振り返り、その実際をまとめ、保育実践の変容や保育者の成長を探るための一基礎資料を得たいと考えた。本稿においては、6 年間の園内研修時に実施された保育実践の実際を報告することを目的とする。

II. 園内研修の目的

対象とするこども園では、2011 年度より「草むらごっこ²⁾」を導入し、園内研修において「草

むら」を活用した「身体表現あそび」の実践を継続していた。しかし、「保育者の身体表現に対する苦手意識は払拭できず、日常的な保育に身体表現を取り入れることが難しい³⁾」現状に悩める状況であった。そこで、2014 年度は、まず、「身体表現あそびが育てる子どもの力を保育者が共通認識し、日々の保育に積極的に取り入れていけること⁴⁾」を目的に、筆者との園内研修をスタートすることになった。

III. 園内研修の概要

1. 期間

2014 年～2019 年の各年度に 2 回ずつ園内研修を実施した。

2. 対象

京都府綾部市 綾東こども園保育者
保育実践を担当したのは、延べ 11 名
なお、保育者と園児の保護者へは、公表も含めた研究への承諾を得た上で、園内研修として実施した。

3. 展開と内容

①午前中に各クラスの保育実践を実施する。観察者は筆者と園長・主任のみであるのでDVDに録画する。②子ども達の降園後に実技講習及び各保育実践の検討を行う。この実技講習と検討の時間配分は、その日によって異なるが、回数を重ねるにつれ、実技講習から実践検討に比重は移行していった。また、録画したDVDの視聴も、当初は宿題として課していたが、保育者の負担を考え、2016年度より、当日一緒に視聴し、その後意見交換をするようになった。その視聴に関しては、参加の保育者に、毎年その年度の観点を決め、記録を求めてきた。

4. 保育実践の概要

6年間の園内研修において実施された保育実践に関しては、表1として、実施年月・担当者・クラス・題材を一覧にまとめた。この表より、3歳・4歳・5歳のクラスは毎年度2回ずつ実施しているが、2歳児は2014年度・2015年度・2016年度の3年間は1回である。2017年度は0回であるのに対し、2018年度と2019年度は2回実施するようになった。さらに、2019年度について

は、1歳児クラスの実施も実現している。つまり、低年齢の子ども達に実践が広がっていったのがわかる。また、題材としては2014年度には1つも見られなかった、絵本を手がかりにした表現あそびの実施が増えていることがわかる。これは2014年11月の実技講習にて、絵本のストーリーの身体表現創作を経験したこと、2016年6月に、絵本を手がかりにした保育のビデオを視聴する機会を持ったことが、このような実践の契機になったと推察される。担当者を見てみると、全12回の実践を行ったのはC保育者1人であり、次いで、B保育者とD保育者の7回が多いが、半数以上の実践を担当したのは、この3名である。

5. 記録の観点とねらい

午後の実践検討における、DVD視聴時の記録の観点を示したのが表2である。この表より、2014年度と2015年度は「子ども」「保育者」という、保育を見るときの基本的な観点が設定されている。つまり、この年度は、「苦手意識の払拭」という、園内研修の当初の目的に焦点が当たり、保育実践を研究保育として検討する目的が明確にあったとは言えない。つまり、保育実践の内容

表1. 保育実践題材一覧

年	月	クラス									
		担当	5歳	担当	4歳	担当	3歳	担当	2歳	担当	1歳
2014	6	A	風に吹かれて遊ぶ	I	ボール	C	赤ずきんになって散歩する				
	11		忍者		新聞紙		ボール	K	おにぎり		
2015	8	C	シャボン玉	B	おたまじゃくし	I	オオカミが来た!				
	11		くっついた		芋掘り	J	バス・飛行機	A	「だるまさんが」		
2016	6	C	キノコの森へ行こう	A	春	B	カエル				
	11		身体じゃんけん		秋のおさんぽ	D	粘土	H	「さつまのおいも」		
2017	8	D	川の生き物	C	スイミー	B	カエル				
	11		オノマトペ		忍者		まねっこジャングル				
2018	7	B	蚕	E	虫	D	カエル	C	「ばんだなりきりたいそう」		
	11		ピザを作ろう		秋の自然		「うえきばちです」		「キューピーちゃんのがんきいっぱいおいもほり」		
2019	8	C	「にじいろのさかな」	F	新聞紙	E	「きんぎょとめだか」	D	「もこもここ」		
	11		水族館		新聞紙		さつまいも		生き物	G	「だるまさんが」

や方法を検討する以前に、「身体表現あそび」を実施することを目的としていたと言える。

しかし、観点の②を見てみると、2016年度では、まず、保育実践の「良い点」「改善点」という観点で実践そのものを検討するところから始まり、2017年以降は、具体的な研究保育の目的が観点として示されるようになった。ここに、園内研修としての質の向上を読み取ることができる。

保育者の身体表現あそびに対する意識改善を目指すところからスタートした園内研修が、各年度の具体的な研究保育の目的を定め、保育そのものを検討する研修に変容していったと捉えることができる。つまり、「身体表現あそび」の保育実践そのものが目的であった園内研修が、研究保育として保育実践を位置づけ、園全体として共通のテーマを定め、保育の質の向上を目指す研修へ変容したと言えよう。

Ⅳ. 保育実践の内容と検討

各年度に実施した保育実践について、各回の「ねらい」「展開」を、実施日別の表3～表8にまとめた。これらの表と、DVD視聴後の記録から、その特徴を探ってみたい。なお、記録に関しては、前述したように実施年度により観点が異なるため、主に、園長（渡邊）のコメント（日本保育学会の大会論文集への記載内容も含む）を参考にした。

1. 2014年度の実践

表3より、この年度の実践について、まず、「ねらい」を見てみると、「身体を動かす」との記述が大半に見られ、表現的な要素は感じられない。この「身体表現あそび」の実践を保育者のほとんどが身体を動かす機会として捉えているものと読み取れる。また、「展開」も大まかであり具体性に欠けると言えよう。さらに、「モノを使用

表2. 記録の観点

年度	観点①	観点②	観点③
2014	子どもの様子	保育者の工夫	その他
2015			
2016	実際の展開	良かった点と悪かった点	感想
2017		“一緒に”が感じられた場面	
2018		子どもの主体性を感じたところ	
2019		どんな“一緒に”が見られたか	

した表現あそびが多く見られ⁵⁾、「子どもに主眼をおいて選択するより、『他の保育者の実践DVDを参考に』するなど、保育者が実践しやすい題材を選択する傾向があった⁶⁾」ことが、この年度の特徴としてあげられる。

2. 2015年度の実践

表4より、前年度同様「ねらい」に関しては「身体を動かす」との記述も見られるが、B保育者以外は全員が「一緒に」と記述している。ここに、子どもや保育者と一緒に身体を動かす機会としての視点が感じられる。この年度の特徴は、「シャボン玉・おたまじゃくし・おいも」など、「子ども達が生活の中で触れたり体験したことを題材として選択し⁷⁾」、その「展開」も詳細で具体的な実践が見られようになってきたことである。特に、4歳児と5歳児では、「子ども達の体験に基づく表現的な内容が保育の中心になっている⁸⁾」と園長は捉えている。

3. 2016年度の実践

この年度は、保育学会での発表において、サブタイトルを『「〇〇になってから」の表現を深めるために⁹⁾』とした。「保育者の記録において、『年齢に合わせた展開』や『展開のために必要な導入』など、展開に関する記述が見られたほか、

表 3. 2014 年度保育実践

① 2014 年 6 月

クラス	5 歳	4 歳	3 歳
担当者	A	I	C
ねらい	(未記入)	身体を動かしてあそぶことを楽しむ	リズムに合わせて動く・草むらの出入りを楽しむ
展開	○新聞紙になって風を感じる・飛んでいく・丸まって転がる○各自が新聞紙を持って・おなかにくっつけて走る・頭にかぶって歩く・足に挟んで跳ぶ・破いて手に持って振る	○ボールになってあそぶ・転がる・止まる・跳ねる・膨らむ・くつつく・しばむ	○赤ずきんになって散歩する・歩く・走る・しゃがむ・隠れる (オオカミが来た)

② 2014 年 11 月

クラス	5 歳	4 歳	3 歳	2 歳
担当者	A	I	C	K
ねらい	友達と一緒に身体を動かすことを楽しむ	身体を動かしてあそぶことを楽しむ	友だちと一緒に身体を動かすことを楽しむ	保育者や友だちと一緒に身体を動かしたり、ふれあったりすることを楽しむ
展開	○忍者ごっこをする・草むらに隠れる・足音を立てないで歩く・水遁の術・ゴロゴロの術・1 本足で歩く・空を飛ぶ	○新聞紙になってあそぶ・広がる・丸まる・転がる・跳ぶ	○ボールになる・動く・丸くなる・転がる・跳ねる・止まる・集まる	○おにぎりに変身して動く・丸まる・転がる・食べられる・お弁当箱に入る・みんなでくつつく

表 4. 2015 年度保育実践

① 2015 年 8 月

クラス	5 歳	4 歳	3 歳
担当者	C	B	I
ねらい	友だちと一緒にシャボン玉になりきって動くことを楽しむ	身体を動かしてあそぶことを楽しむ・身体を十分に動かす心地よさを味わう	友だちと一緒に動くことを楽しむ
展開	○シャボン玉になってあそぶ・シャボン玉液になる・どろどろ・混ざる・シャボン玉になる・ふくらむ・飛ぶ・割れる・くつつく	○おたまじゃくしの卵になる・足と手が出る・赤ちゃんカエルになる	○動物になってあそぶ・ウサギ・ぞう・「オオカミが来たよ」で草むらに隠れる

② 2015 年 11 月

クラス	5 歳	4 歳	3 歳	2 歳
担当者	C	B	J	A
ねらい	友達と一緒に身体を動かすことを楽しむ	身体を動かしてあそぶことを楽しむ	保育者と一緒に身体を動かすことを楽しむ	保育者や友だちと一緒に身体を動かして楽しむ
展開	○2 人組になって「ひつつきもつつき」・身体の色々な所 (頭・ほっぺ・おなか・お尻) をくっつける○自分の身体 (手・足・膝・肘・お尻・おなか・...) ⇒ (1 カ所・2 カ所・3 カ所) を床にくっつける	○おいもになってあそぶ・隠れる・引っ張られる・引っ張る・転がる	○バスになって部屋から移動・ゆっくり・ガタガタ・ストップ○飛行機になってあそぶ・ゆっくり・飛び立つ・速く・着陸・部屋に帰る	○まねっこあそびをする・保育者の真似をして動く (ビタッ・ぶらぶら・動物) ○「だるまさんが」の絵本を見てあそぶ・ドテッ・ブシュー・ピローン

『子どもの自発的な表現の拾いあげ方』『表現あそびを充実させる連携』なども記述されて¹⁰⁾おり、保育実践の検討に関して次の段階に進んだ年度であると考え。それは、次の結果からも明らかである。まず、表5に示された「ねらい」に、「なりきって動く」「表現を共有」「変身して楽しむ」などの表現的な要素を示す言葉が、初めて用いられるようになった。つまり、表現を意識するようになった保育者（B・C）が確認できたのである。さらに、それぞれの実践が多様であり、具体的に展開されていることがわかる。特にA保育者（6月の実践）は、当日の子どもの様子から、事前に立てていた指導案「ボールになって」を取りやめ、「子どもの発信する表現を見事にキャッチして、すごく拡がりのある、かつ、まとまった表現あそび」を実施したと園

長はコメントしている。本人も「子ども達のひらめきやイメージを取り入れながらあそびとしては、まとめられたと思う」と振り返っている。つまり、生きた、自分なりの実践を展開したものと捉えることができる。そして、園長は「子ども達の身近な経験から自発的な表現をひきだし、それを満足させるために保育者として何が必要なのかを探究する姿勢が確認できた¹¹⁾」と、この年度の成果を捉えている。

4. 2017年度の実践

この年度の実践は3名の保育者（B・C・D）に限定された。園長は「それぞれの保育者があそびの経験を身体表現あそびに自然につなげて楽しみ、子ども達の表現も豊かになってきた¹²⁾」と現状を捉えている。また、この年度は、「ねら

表 5. 2016 年度保育実践

① 2016 年 6 月

クラス	5 歳	4 歳	3 歳
担当者	C	A	B
ねらい	友だちと一緒にきのこの森をイメージしながら楽しむ・川の生き物になりきって動くことを楽しむ	(急遽指導案以外の内容に変更)	カエルに変身して楽しむ
展開	○きのこの森へ出発・バスになる・歩く・滑り台を滑る・お弁当を食べる・川をのぞいてみる・川の生き物(カエル・なまず・かに・ざりがに・おたまじゃくし)になる・バスに乗って帰る	○木になる・花が散る・散った花びらが戻る・雨が降る・雷が落ちる・お日様が出てくる・木の葉っぱに虫(カタツムリ・カエル)がいる・木になる子と虫になる子で関わる	○カエルに変身する・小さい・中くらい・大きい○カエルになってあそぶ・ビヨーン・ベチャ・グワッ・蛇の出現

② 2016 年 11 月

クラス	5 歳	4 歳	3 歳	2 歳
担当者	C	A	D	H
ねらい	じゃんけんを楽しみながら友だちと表現を共有する	友だちや保育者と一緒に身体を動かして楽しむ	友だちや保育者と一緒に身体を動くことや真似することを楽しむ	保育者や友だちとふれあい、喜んで身体を動かしてあそぶことを楽しむ
展開	○身体でじゃんけんをする・手で・足で○身体でグーチョキパーを表現する・お互いに表現のまねっこ・ペアでじゃんけん対決	○秋のお散歩に行こう・山道を歩く・どんぐり、松ぼっくり、みのむし、動物になる	○粘土になろう・粘土を見ながらなる・伸ばす・丸める・転がす・動物を作る・動物になる・ひとつにまとまる	○おいもになろう・お芋掘り・掘ってもらう・みんなで芋掘り・葉っぱを集める・やきいもになる

い」のほとんどに「一緒に」との記述が見られたこともあり、「保育の中に生じる『一緒に』の様相¹³⁾」を検討することにした。具体的には、一緒に「何を楽しむ」のかに関して、表6の「ねらい」から検討すると、3歳児は「動くこと・イメージしながら動くこと」。4歳児は「身体を動かしたり表現すること・忍者になりきる」。5歳児は「表現の世界」と記述されている。この「表現の世界」との用語に注目したい。当初、身体を動かす機会として捉えていた実践を、イメージを共有してつながることにより共創することができる「表現の世界」を楽しむ機会と、B保育者は捉えるに至ったのである。その背景には、保育者自身がこの世界観を楽しんだ実感が存在すると考える。また、C保育者の実践に対して、園長は「子どもとのやりとりをしながら世界観を作り上げていた(8月分)」「うさぎに変身した忍者になりきれたことがスゴイ。ねらった世界観が達成できていた(11月)」と世界観に触れるコメントをしている。保育者の成長をここに感じることができる。

5. 2018年度の実践

この年度は、昨年の3名に加えて新たにE保育者が挑戦している。表7より、「ねらい」に関しては、実践を継続しているB保育者とC保育者は、具体的な自分なりの「ねらい」を記述するようになってきている。「展開」について見てみると、B保育者に関しては、11月の実践において、事前に立てていた指導案を取りやめ、直前に保育室で体験した「ピザ作り」の表現あそびに変更している。この「体験がタイムリー」だったのか、具体的に展開し、「思ったより子どもの反応が良く、発酵で終わるつもりが、子どもがふくらんだので焼き上がりまで表現」したと振り返っている。まさに、「表現の世界」を子どもと一緒に作っている様子が読み取れる。また、D保育者も11月の実践において、子ども達の好きな絵本「うえきばちです」を取り上げ、「ふくらませ方が課題だった」が「絵本の世界を楽しむ。保育者の成長を感じる」とのコメントを園長は記述している。

表6. 2017年度保育実践

① 2017年8月

クラス 担当者	5歳 D	4歳 C	3歳 B
ねらい	友だちと一緒に動くことを楽しむ	友だちや保育者と一緒に身体を動かしたり表現することを楽しむ・海の生き物になって表現することを楽しむ	かえるに変身してあそぶことを楽しむ
展開	川の生き物になる・川遊びを思い出す・いろいろな生き物(かに・えび・カエル・おたまじゃくし・タガメ・タイコウチ)になる・保育者が捕まえる・竜巻がくる	○スイミーの世界を表現する・スイミーの絵本を見る・小さな魚になる・大きな魚から隠れる・クラゲ・エビ・ウナギ・イソギンチャクになる・みんなで大きな魚になる	○カエルに変身する・おたまじゃくし・赤ちゃんカエル・カエルになってあそぶ

② 2017年11月

クラス 担当者	5歳 D	4歳 C	3歳 B
ねらい	友だちと一緒にイメージしながら動くことを楽しむ	みんなで一緒に忍者になりきる・忍者になりきっていろんな表現を楽しむ	保育者や友だちと一緒に表現の世界を楽しむ
展開	○オノマトペのイメージを動きで表現する・繰り返しの音(チャブチャブ・ザブザブ・ドンドン・ボタボタ)であそぶ・音からイメージする・友だちと相談して表現する・グループ発表	○忍者修行をする・足音を立てないで歩く・すり足・忍者走り・術(壁の術・ウサギの術・床の術・水遁の術・石の術)をかける・手裏剣を交わす	○まねっこあそびをする・保育者のまねをする・「これなーんだ?」と動物になって(トンボ・ウサギ・ワニ・サル)あそぶ

表 7. 2018 年度保育実践

① 2018 年 7 月

クラス	5 歳	4 歳	3 歳	2 歳
担当者	B	E	D	C
ねらい	友だちと一緒に表現の世界を楽しむ・蚕になりきってあそぶことを楽しむ	友だちや保育者と一緒に身体を動かすことを楽しむ	保育者や友だちと一緒に身体を動かしてあそぶことを楽しむ	絵本や保育者を見て真似て動くことを楽しむ
展開	○蚕になる・おいしい桑の葉を求めて探索・桑の葉を食べて大きくなる・掃除のために捕まえられる・糸を吐く・繭になる・繭から出る・蛾になる	○虫（バッタ・蝶々・カマキリ・アリ）になる・捕まらないように逃げる○キャベツ畑に行く・蝶々の卵を発見・幼虫がさなぎになる・風に揺れる・蝶々になる	○カエルになる・「10 匹のカエル」を見る・おたまじゃくしになって泳ぐ・カエルに変身・カエルが散歩する・エサを探す・保育者が蝶々やカタツムリになって一緒に遊ぶ・保育者がカニになると逃げ始める	絵本「ばんだなりきりたいそう」を見ながらまねっこあそびをする・チューリップ・バナナ・コマ・飛行機・おにぎり・ロケット・どんぐり）○保育者のまねっこ動物（サル・カエル）

② 2018 年 11 月

クラス	5 歳	4 歳	3 歳	2 歳
担当者	B	E	D	C
ねらい	友だちと一緒に表現の世界を楽しむ・友だちと一緒にイメージを膨らませる楽しさを味わう	身体を使って表現あそびを楽しむ	友だちや保育者と一緒に身体を動かしてあそぶことを楽しむ	絵本を見ながら表現を楽しむ・みんなと一緒に表現であそぶ
展開	○直前にやったピザづくりを表現する・材料になる（さらさら滑る強力粉・ふくらし粉・砂糖・塩・水）混ぜて生地を作る・ドロドロなので再度粉を入れる・まともてこねる・発酵して膨らむ・大きくなる・トッピングをして焼く・焼き上がったピザを保育者が食べる	○秋の散歩で見つけた秋を表現する・散歩に出かける・どんぐり（小さい・大きい）転がる・木についたどんぐり・松ぼっくり・食べられた松ぼっくりはエビフライ・サルの登場）	○絵本「うえきばちです」の世界を表現する・芽が出る・葉っぱも出る・蔓も出てくる・おひげも生える①お芋ができた・お芋掘り（一人ずつ抜く）・葉っぱをかけて焼き芋②トンボ	○絵本「キューピーちゃんのがんきいっぱいおいもほり」を見る○お芋掘りの前にあそぶ・ぐるぐる（回る）ぴょんぴょん（飛ぶ）○お芋掘り・お芋を掘る・お芋料理を食べる

6. 2019 年度の実践

この年度は、1 歳児クラスも挑戦するに至った。表 8 より、8 月ではすべての実践において、11 月も 1 歳児と 4 歳児以外の実践において、担当保育者は「ねらい」に「一緒に」と記述している。つまり、この園においては、一緒に「身体表現あそび」をすることが「就学前までに育つことが求められる『人と関わる力』の獲得に大いにつながっていく¹⁴⁾」との意義を、共有しつつあると推察できる。そして、新たに担当した F 保育者（4 歳児）以外は、8 月には、保育室で読んだ時の反応から、子どもの好きな絵本を選択し、11 月には、この実践以前に一緒に体験した「水族館への遠足」「焼き芋」「お散歩」を

題材として取り上げている。つまり、園内研修を継続する中で、子ども主役の題材を選択することが定着してきたことがわかる。さらに、実践の中で、「子ども達の思いがみんな違ったので、それぞれを受け入れるとバラバラに・・・(D 保育者)」との課題を残しつつも、「子どもたちの意見を取りあげながら (C 保育者)」展開している様子も、園長のコメントより把握することができた。

V. まとめ

本研究においては、2014 年度より 6 年間にわたって、年 2 回の「身体表現あそび」の保育実践を継続し、子どもの降園後、実技研修や実践検討を積み重ねてきた。延べ 11 名の保育者の、

表 8. 2019 年度保育実践

① 2019 年 8 月

クラス	5 歳	4 歳	3 歳	2 歳
担当者	C	F	E	D
ねらい	海の中のイメージをしなが ら色々な生き物を表現 する・友だちと一緒に楽し みながら表現する	友だちと一緒に表現する ことの楽しさを知る・イ メージを膨らませてあそ ぶことを楽しむ	友だちや保育者と一緒に身 体を動かすことを楽しむ	保育者や友だちと一緒に あそぶことを楽しむ
展開	○「にじいろのさかな」の世界 を楽しむ・絵本を見る・海の中 をイメージする・ストーリー を追っているいろいろな生き物 (岩・わかめ・赤い海藻・ちょ うちん魚・お医者さん魚)・役 割がでてきて世界を共有する	○新聞紙になりきってあ そぶ・たたむ・広げる・丸 める・広げる・投げる・ひ らひら・破る・大きな新聞 紙になる	○「きんぎょとめだか」の絵 本でまねっこあそびをする・ 絵本を読む・泳ぐ(歩く・後 ろ向き)・ちとちと歩く・ジャ ンプする・大きな魚がきて隠 れる・網で捕まる	○「もこもこもこ」の絵本 でもこもこになってあそ ぶ・保育者と一緒に絵本に 出てくるオノマトベを動き で表現(シーン・もこもこ・ ニョキ・パクッ・つん・プー・ パチン・ファンワフンワ)

② 2019 年 11 月

クラス	5 歳	4 歳	3 歳	2 歳	1 歳
担当者	C	F	E	D	G
ねらい	友だちと一緒にいろい ろな生き物の表現を楽しむ	イメージを膨らませ て遊ぶことを楽しむ・ 自分なりの動きを表 現することを楽しむ	友だちや保育者と一緒に あそぶことを楽しむ	保育者や友だちと一 緒に生き物になって あそぶことを楽しむ	保育者や友だちと身体 を動かすことを楽しむ
展開	○水族館に行こう・海の 生き物(ペンギン・カニ・ チンアナゴ・イワシ・イ カ・タコ・クラゲ・エイ・ タイ・オオサンショウウ オ・アザラシ)・イルカ ショーであそぶ	○新聞紙になりきっ てあそぶ・風に吹かれ る(ふわふわ・わ びゅう)・雨にぬれる (小さくなる・転がる) 雨があがって広がる	○おもいになってあ そぶ・やさしいもグー チャーパーであそぶ・お いもほり・運ぶ・洗 う・やさしいもをする・ 食べる・食べられる	○お散歩で出会った 生き物になる・お散歩 に出発・どんぐりを拾 う・カエル・カラス・ ヘビ・トンボ・カニに なる・ごはんを食べる	○絵本「だるまさん が」を見て身体を動か す・どて・ぶしゅー・ ビローン・にこ・ぴょ んぴょん・ピタッ

全 44 実践を検討したことになる。

「身体表現あそび」を保育に取り入れたいとの強い思いを持つ園長が主導して始まった園内研修であったと記憶している。筆者は、保育者の、どちらかというと後ろ向きの姿勢を感じながら、実技を通して楽しさを伝えるときに、実践のハードルを下げる努力をしてきた。今回、44 の実践を振り返り、寄り添う時間を積み重ねる過程で感じつつあった、保育の変容と保育者の成長を確認できたと考える。

まず、「身体表現あそび」の保育実践にもかかわらず、「ねらい」に表現的要素の記述が見られず、運動的視点での「身体を動かす」機会として捉える現状からスタートしたのである。それが、

「ねらい」に自分なりの言葉の選択が見られ、「なりきる」「表現の世界」などの表現的要素も盛り込まれるようになった。さらに「一緒に」行う実践としての意義を見だし、その「一緒に」の深い意味を探究する所まで来ていると考える。

題材選択においては、当初、前年度の DVD を参考に、保育者主導で選択する傾向があったが、日々の子どもの様子や、生活での経験をベースとして、子どもを主役とした題材選択をするようになった。恵まれた自然環境を存分に活かした生活や、読み聞かせをした絵本を、身体表現あそびにつなげる実践も多く確認することができた。中には、事前に立てていた指導案を、実践の当日、急遽変更した実践も見られた。まさ

に、日々の、目の前の子どもを大切に、この日の実践に向かう保育者の姿勢が読み取れ、この姿勢に保育者の成長を確認することができた。このように、日々の生活と表現あそびがつながるようになったため、子どもと保育者が共有した経験に基づくイメージを描くことができ、展開も豊かで具体的になっていった。両者の楽しい気持ちも共有されている状況が伺え、この状況こそが保育実践においては重要な意味をもつのである。


また、スタートした2014年6月の3つの実践に対して、園長は「共通しているのは、ひとり一人の子どもの姿を取り上げて、認めたり周知させる言葉かけが少ない」とのコメントを記述していた。それが今では、園内研修を継続してきたC保育者においては、「集団をまとめながら個人の自由な表現を上手く引き出されていた」と、成長を認めているのである。一方、この間、保育者の入れ替わりもあったので、新たな保育者が挑戦するようになってきているが、C保育者のような研修を継続している保育者が見本となり、次に伝える土壌も形成されつつあると感じる。

最後に、保育者の苦手とする「身体表現あそび」の実践を、この園の保育に取り入れることを目的に始まった園内研修は、継続の過程において、実践することのみに意義を見いだすのではなく、研究保育として位置づけ、保育の中身を検討する研修へと向上していった。その背景には、「身体表現あそび」の表現的要素の魅力に気づき、子どもと「一緒に」その表現の世界を楽しむまでの、各保育者の成長があると考ええる。当初「いつでも、どこでも、誰とでも」行うことが可能な一般的な保育実践が主流であったのに対し、昨今は、「いま・ここで・この目の前の子どもと」一緒に共有したい、自分なりの保育実践へと変容してきた点に、その成長を確認す

ることができたとまとめたい。

今後も園内研修に寄り添い、保育者のスキルアップに貢献するとともに、ここでの研究を本学における保育者養成教育につなげたいと考える。

注及び引用文献

- 1) 本山益子 渡邊友子 身体表現の園内研修—保育者対象の実技講習より— 京都文教短期大学研究紀要第56集 p.95 2017
 - 2) 2014年度以前に、このこども園において園内研修を担当していた、元同朋大学講師の平野仁美氏が考案した、段ボールなどによって作成された下図のような草を数個用いて作られた空間にて行う「身体表現あそび」
- 
- 3) 渡邊友子 上田洋美 塩尻麻子 本山益子 身体表現の園内研修を通して—保育者の学びと育ち— 日本保育学会第68回大会論文集（ページの記載なし・発表番号：15045）2015
 - 4) 前掲3)
 - 5) 前掲3)
 - 6) 渡邊友子 上田洋美 塩尻麻子 本山益子 身体表現の園内研修を通してⅡ—保育実践の変容— 日本保育学会第69回大会論文集 p.507 2016
 - 7) 前掲6)
 - 8) 前掲6)
 - 9) 渡邊友子 青山正江 塩尻麻子 本山益子 身体表現の園内研修を通してⅢ—「〇〇になってから」の表現を深めるために— 日本保育学会第70回大会論文集 p.577 2017
 - 10) 前掲9)
 - 11) 前掲9)
 - 12) 青山正江 塩尻麻子 本山益子 身体表現の園内研修を通してⅣ—保育の中に生じる“一緒に”の関係— 日本保育学会第71回大会論文集 p.1051 2018
 - 13) 前掲12)
 - 14) 渡邊友子 青山正江 塩尻麻子 本山益子 身体表現の園内研修を通してⅤ—保育のねらいとしての“一緒に”を考える— 日本保育学会第73回大会論文集 p.466 2018

